

編集後記

*『言語文化』二十一号をお届けする。今回は食物と言語という問題に焦点を当てて、特集を組んだ。海外から数多くの寄稿を受けたことは、研究所の幸甚とするところであった。本研究所所員である天沢、四方田は別にして、寄稿者についてこの場を借りて、簡単に紹介をしておきたい。

*梁秉鈞氏は香港の詩人にして小説家であり、嶺南大学で比較文学を講じている。森枝卓士氏はユージン・スミスの薫陶を受けた写真家であり、また料理研究家として数多くの書物を刊行している。宮内淳子氏は手塚山女子大学の近代日本文学の教授であり、岡本かの子や谷崎潤一郎といったグルメ系文学者についてモノグラフイをものしている。石月麻由子氏は早稲田大学大学院で坂口安吾について博士論文を準備中であり、前号付録のCDで宮澤賢次の詩を朗読した。中山エツコ氏はヴェネツィア大学助教授で、イタリア現代文学の紹介翻訳に従事している。前号ではイタリア料理大全ともいうべき

アルトウージの『料理の学』について論じていただいたが、目下この大著を翻訳する計画が進行中である。佐藤幸治氏は国際交流基金の職員で、二〇〇三年までデリーに勤務していた。ジョン・クラーク氏は、これも前号のアジア美術論に続いて二度目の登場であるが、シドニー大学教授であり、九鬼周造の『いきの構造』の英訳がある。カール・ハイנטツ・クロープフ氏はウィーン在住の都市研究家で、日本についての研究がある。本稿は本来はヴィデオ作品のスク립トであり、そのフォトグラムを五点掲載する。最後の伊東順子氏はソウル在住の韓国文化研究者であり、著書として『病としての韓国ナシヨナリズム』（洋泉社新書）がある。また二論文の翻訳を担当した山本直樹氏は漫画家ではなく、本校大学院博士課程で伊丹万作を中心とした日本映画論を準備中の秀英研究者である。

*特集とは別に掲載されている四編の翻訳、エッセイ、講演記録についても、説明をしておきたい。ウィーン・リヨウワールン氏はタイ文学の中堅作家で、短編集『インモラル・アンモラル』の翻訳がある。訳者の宇戸靖治氏は東京外国語大学教授で、タイ文学が専門。本研究所で二〇〇

三年よりタイ語の講座が開始（宇戸夫人マリー氏が担当）されたことを記念して、ここに寄稿をいただいた。吉田喜重氏は二〇〇三年に大作『鏡の女たち』を発表した映画監督である。二〇〇三年五月二十四日に本学文学部芸術学科主催で行なわれたシンポジウム『吉田喜重の全体像』の際の講演と質疑応答を、ここに採録する。ピーター・セラース氏は「アメリカの野田秀樹」とも評判の高い劇作家で、これも芸術学科主催で行なわれた講演を採録したものである。ちなみに巖谷と岡部は本研究所所員である。

*二〇〇三年度には、この他にも七月九日から十六日にかけて、台湾の著名な書道家にして中国文学の研究者である唐翼明教授をお迎えし、さん・サンホールにて書道展と書道パフォーマンスが開催された。本号表紙の題字はそのさいに氏によって書かれたものである。また十一月八日にはアートホールを会場として、第三回目のポエトリー・リーディングが開催された。十二月には一橋大学のイ・ヨンスク教授、パリ第七大学のセルル坂井教授の講演があった。これらについては、次号にその記録を掲載する所存である。

（四方田大彦）